

# 長野県革新懇ニュース

2019年1月号  
発行日1月10日  
会費 2,000円  
購読料 3,000円(送料込)  
振替 0510-3-15971

236

発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会  
(長野県革新懇) 発行人: 山口光昭 編集長: 高村裕  
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内  
TEL: 026-234-1231 FAX: 026-234-2219 メール: mail@nagano-kakushinkon.com

====今号の主な記事====

- 1面 中村育子さんインタビュー
- 2面 1面続き、近現代信州の歴史回廊
- 3面 黒塗り文書の公開を求めて提訴  
読者の声
- 4面 「乾癬」の話 窪島誠一郎さん  
映画評論『不都合な真実2』内山到さん  
漢字パズル

長野県革新懇

検索



1982年長野市生まれ。2008年信越放送入社。報道部で記者として県警・県政等を担当。2017年4月に制作したドキュメンタリー番組「SBCスペシャル かあちゃんのごはん」で、全国の優れた映像作品を顕彰する第37回「地方の時代」映像祭2017グランプリを受賞。

## 日々の食事の変化を見つめ

## 母子家庭の生活にせまる

中村 育子 さん

(信越放送報道部記者)

### 移住を希望する 背景を知りたくて

Q 中村さんが作られたドキュメンタリー「かあちゃんのごはん」が第37回「地方の時代」映像祭2017グランプリを受賞され、大変おめでとうございます。早速ですが、この番組を作られた動機をお聞かせ下さい。

あらずじを簡単に言うと、首都圏に暮らすシングルマザーの親子が青木村に移住して生活を始めた10ヶ月を追った番組です。親子の日常を描くことで何が変化していくのかということに焦点をあて、まとめたものです。私は報道部の記者で、取材当時は県政を担当していました。県のプレスリリースを毎日見ている、その中に1枚、長野県

で初めて青木村がシングルペアレントの移住を応援するお試しツアーを実施するというお知らせがあったんです。当初はニュースでちょっと触れられればいいな、どんな人が来るのかな、というような個人的な興味もあって、東京の銀座NAGANOで行われた「移住お試しツアー」の説明会に参加したんです。

行ってみてビックリしたんですが、主催した県や青木村の予想をはるかに超える数のシングルペアレントの方がいらして、てんてこ舞いで対応しきれない状態でした。皆さんかなり真剣な顔で村や県の担当者について聞けるんだ、どんな仕事があるんだ、勤務はどうなっているのか、というような移住に関わることについて聞いていました。

私はその状況を見て、これは普通のお試しツアーとか体験移住者の相談会ではないというところをすごく感じました。参加していた親子の表情がすごく真剣なので、なんで長野に移住したいのかを本腰を入れて取材したいと思い、その説明会でいろんな親子のお話

を聞いて回ったんです。

その中で出会ったのが今回の番組で主人公になったケイコさん(取材当時38歳)とリコちゃん(同6歳)の親子です。お二人になんで長野に来たいんですかと尋ねたら、とにかく今の生活をどうにかしたいんだ、もう限界なんだとおっしゃったんです。見た目にはまったく貧しい様相もなかったし、どこにでもいる親子なので、どうしてなんだろう、その理由が知りたいと思いました。

そこで、お家の中の様子なども含め取材を願いましたところ、ひとり親の抱えている現状が少しでも伝わって改善するのならいいですよと快諾いただきました。お家は一般的な普通のアパートなんですけど、どうも台所が変だなと思いついたらガス台がないんです。見たらガス台がないんです。どうやってご飯を作っているのか尋ねたら、カセットコンロでまかなっているとのことだったので、この親子大丈夫なのかなというように思いました。何回かお邪魔して、密着取材を続けました。ニュースではとても収まらないので、都会のシングルマザーが抱える生活実態に焦点を当てた番組にすることになりました。



信越放送のHPより

### 食事の変化を通じて 親子の変化を追う

Q カレーの食事シーンが続きますが、何かの意味を込めたのでしょうか？

当初、番組としてまとめた時はカレーとかご飯にフォー

カスしたのではなくて、お二人の日々をどんなに追っていった記録みたいな内容だったので、2時間とか3時間の長さになってしまいました。上司の手塚(註:本紙230号に登場された手塚孝典さん)に相談したところ、「言いたいことは一つでいいんだよ」というアドバイスももらったので、当初はいろんな視点からの画を入れたんですが、思い切って親子だけの様子に絞って半分ぐらいにしました。

中でも毎日のご飯のシーンを繋げるだけで、伝えたいことが流れてくるんじゃないかなというところに気づいて、そのシーンを並べていったら、たまたま最初に行った日もカレーだったし、最後に食べたのもカレーだったんです。最初はお飯もカレーもレトルトだったんですが、最後はリコちゃんと一緒に人参を皮むきして自分たちで作ったカレーだったわけです。それはすごく大きな変化で、誰かから強要されたものではありません。

生活の根源となるご飯が自然と変わっていったというシーンを映せば、何も言わなくても都会ではそれをやる余裕はなかったし、周りの支援もなかったけれど、青木村に来たら、時間の余裕が生まれ、近所の人採れた野菜やコマをもってきてくれる、子どもも学校でいろんなことを学んでくる、それに対して親子の会話も始まる、一緒にご飯をつくりそれを食べる、そうすると今まで少食だったリコちゃんがお代わりする、この変化こそが本当に彼女たちが求めていたもので、今までの

### 子どもを思う 母の強さを実感

Q この取材でどのようなことを感じられましたか？

凄く感じたのは母強しという気持ちですね。お母さんになると人はこんなに強いんだ。最初の移住体験の相談会にはお父さんのシングルペアレントもいっぱいいたんですが、やっぱり圧倒的にお母さんの方が実行に移す確率が高かったですね。女性も子どものために決めるというのは決断力として強いと思えました。お父さんの方は、仕事はどうなのかかなり心配されて、結局来ないという例が何回もありましたが、ケイコさんは少しでもリコちゃんの毎日が楽しくなるんだと思ったら、私が頑張るから行こうと決断されたんです。

実は取材中、私も妊娠していたんですが、それを見て母ちゃんになるって強いんだなーとつくづく感じました。子どもの人生がかかっていると、思うといろんなことを投げ売ってでも尽くすという習性のようなものが母親にはインプットされているという思いを強く持ちました。

【2面に続く】